

ヘルダーの国民および国家という考え方 ——ヘルダーの世界観の範囲で—— (2)

著者：テレゼ フォン ラーディゲス

1920年7月28日

ルートヴィヒ - マクシミリアン - 総合大学 ミュンヘン

哲学部 (第 I 学科) 博士学位取得論文

バイエルン州立 - ミュンヘン図書館所蔵

Herders Auffassung von Nation und Staat im Rahmen seiner Weltanschauung

Inaugural-Dissertation zur Erlangung der Doktorwürde

der philosophischen Fakultät (I. Sektion) der Ludwigs-Maximilians-Universität zu München

vorgelegt von Therese von Ladiges

Bayerische Staats-Bibliothek Muenchen

訳 鎌野多美子*

(übersetzt von Tamiko KAMANO)

キーワード

ヘルダー・イデー・国民・国家・民衆・時間・オルト・国民性・伝統力・言語・
人間性・人権・態度表明・ゲルマニア気質

2) 『イデー』の時期

『イデー』において国民の概念の形姿は本質的に変化した。1774年の作品を特徴づけている神秘的、宗教的な定義づけは、ここでは消え去っている。周知のように、この作品はライプニッツ³⁸、シュピノザ³⁹、シャフツベリー⁴⁰の影響下にある。人間の意志には限界があるという考え方と、道理に合わない主観的な高い意志に基づいて歴史を先導することは、ここではもはや見つけ出せない。歴史はもはや神の公示——そのようなものとしてヘルダーは1774年に描写した——ではなく、歴史はすべて allgemeine Gesetzen 一般的な法則に支えられている。もはや超越的な神の恣意的意志は人間を行動に踏み切らせる要因でなく、歴史の生成にたいする責任は人間自身にある。『イデー』の人間は、自由の典型である。

*かまの たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2014.6.5受理〉

“感謝させて下さい、われわれ人間に悟性、そして悟性に能力Verstand Kunst（すなわち理性的に行動する能力）das Vermögenをもたらした創造者に”（XIV, 243）。そこに、新たな人間性思想の正体がある。しかしこの自由は、合理的な意図にそって政治的国家的事情を自己判断で生ぜしめることができるという能力を意味することからは、ほど遠い。ヘルダー的な人間は、一度も経験のテーマを克服しないで、歴史に結びついたままである。理性はヘルダーにとっては決して現象界から人間の思考を無制限にもぎとったものでなく、理性は“みじめな打算家”のままである。理性は、よめいている動きに、常にあらたに“試行”“錯誤”Irrtümer Fehlvorsuchenを（XIV, 210）しながら、しだいに世代から世代へ理性自身を明らかにする方法を探すことを命じられている。実際にヘルダーは、『イデーン』の中で理性と公正、表向きは客観的な規準を、人間の行動にとって指導的なものと言っている、が、それでもやはりこの理性は合理主義的で型に填った考え方ではけっしてない——その考え方は啓蒙主義からフランス革命の世代へと影響したにせよ——そうではなくて、この理性は世界を支配している、一步一步ゆっくり個人の器量と性質に応じて制限されながらも人間たちに“神の審問”（XIII, 245）として示現する神の原則のままだった⁴¹。おなじ意味で、人間の事情においても型に填った同質の公正は存在しない、そうではなくて、公正は、個別に器量と性質に応じて承認することである。

形而上学的合理主義の特徴をもって、ヘルダーは全現存を後者の単純な法則から理解しようと努力している。その際に、無限に影響する三つの究極の——すべての現象形態の世界を常にあらたに生み出す——根源的な力Urkraftについての学説を立てている。この三つとは、時間、場所、そして国民性である。それらから——ヘルダーによれば——あらゆる歴史的生命は生じている（XIV, 83. 84）。時間は、ここでは神の精神そのものとして考えられている。現存在にあふれ出ている彼特有の目的に向かってひたむきに努力する発展の中で、常に新しく基盤を形成する神の精神そのものとして考えられている。それとは逆に、場所Ortは一般理解では人間特有の経験の総和である、具体的な故郷として故郷の温かい体験によって信仰の形成・学問・芸術へと進ませる人間特有の、これらの価値の伝承としての第二の力において言語と国民性の中で効力を発揮する人間特有の、経験の総和である。そして第三の国民性は——わたしたちがいうように——受け入れることと消化すること、経験することと表現することに疲れを知らない変化の中で物質世界Welt des Stoffesに没頭する且つその世界を新しい精神的な形に変える、あの生き生きとした秘密に満ちた力である。国民性は、ヘルダーにとってはエンテレケイアE n t e l e c h i eである、すなわち内容と領域に応じてあらかじめ決められた力——そのように彼はそれを数学的自然科学像において表現している——自然科学の主眼と中心、自然科学の作用の仕方と持続時間の最大と最小を自分の中にもっている力である。形而上学における国民という身体と精神の共同体Geistesgemeinschaftをしっかりと根づかせることは、ある意味では1774年の運命という考えの更新である。個人はこの点でも自分自身の存在の独立した企画者ではなくて、そこから彼が出発し、彼を支えている諸関係に根づいているということがはっきり分かる。個人は歴史にもとづく法則によって定められている。しかしそれにもかかわらず『イデーン』においては倫理学のつよい趨勢は、盲目的に影響を与えるこの歴史依存の克服へと移行し

ている。運命という考えと同時に、^{Schicksalsgedanke} 純粹悟性の自由創造力への信念と、人類悟性の最終勝利への強い信念が存在する。『イデーン』の最初のところでヘルダーは——人間の性格の描写の中でみられる——自由と結末の反対への立場をとっている。“わたしたちの悟性は、なるほど現世の悟性である”——そのように彼はいつている——“わたしたちの周りで形成される感性に基づいて形成される、悟性である。だからこそ、それはわたしたちの心の衝動と慕情の味方でもある”。さらに、“すべてを包括する自然は目的をもつであろう、自然は多種多様な被造物の貴重な熱心な試みをついにまとめ、そして全世界の花々をいわば一つの庭に集める目的をもつだろう”(XIII, 20)と続けている。個人の諸要求権利のみを代表した1774年の著書とは反対に、ヘルダーはここでは歴史経過を目的論的な発展思想のもとに描写している。最後の目的の点に関しては、個々の独自性はすべてここでは消えている。“すべての視野は中心点に向かっている”。これは、しかしまさに“どこでも純粹悟性としてだけ存在できる”その“純粹悟性”である、“心のエネルギー”、どこでも“おなじ能力と徳”になるであろう(XIII, 20)“純粹悟性”である。その作品の最終章において、ヘルダーはヨーロッパのしばしの発展を回顧している。発展は彼にとっては普遍的な“理性の文化”への進行である。彼はこの点でこの世紀中における二大勢力の戦いを描写している。一方ではますます増大する自省と個人の自己尊厳、他方では教会と国家の権力と強要。いかにゆっくり且つ絶え間なく人間の基本権、自由と自決が、ローマ教皇庁と独裁的な諸侯の阻止権力に対抗しはじめたかを歴史概観において描写している。はやくも12世紀以降——そのように彼は描写している——目を覚ます趨勢が人類に入りこんでくる。カタリ派、ヴァルド派、フス派、そして他の宗派の異端運動と、最終的にはルターの、ツヴィングリの、そしてカルヴァンの宗教改革は、カトリックの教義の精神的呪縛を打破した。すでにスコラ哲学は、学識ある闘士たちの鋭い洞察力を鍛練しはじめたことで、部分的には人間の精神的解放に寄与した。悟性の味方のスコラ哲学は感情の味方である神秘主義に、自立および内在的意識の学校になった。そしてこれらの純粹な精神的影響力と並行して——ヘルダーはいう——政治的なものが動きを示す。繁栄する商工業、都市大学、都市の独立した且つ自由主義的な制度によって、諸都市は、本当の意味での“文化の陣営”になる。この陣営の中心部で新しい時代の精神が生まれた。ここから、発見者魂と商業は出発した、科学は科学が自然を征服しはじめることから出発した。ここ諸都市を出発点として、経済的・政治的に、行為と模範によって——そうヘルダーは言っている——新しいヨーロッパ、かの“共通した影響力のあるヨーロッパ、啓蒙されたヨーロッパが創造されたのである”(XIV, 487)。

わたしたちは、ヘルダーがこの点で国際的および世界主義的に方向づけられた合理主義の見解からさほど遠くないところにいるのがわかる、そして『イデーン』中のこの趨勢に向き合って二つの問いに答えることができる。二問のうち一つ目は、国民生活の理想はこの新基盤の上でなお引き続いて保たれるのか、どのような人物がそれを受入れるのか。二つ目は、世界主義の流れが全作品の統一的特徴であるのか、である。

わたしたちはあとの問いにとりかかろう。

すでに1774年の著書の中で分かったように、その作品の第2巻における伝統についての

章は、まだ非合理思想の中にどっぷりつかっているヘルダーを見せつけている。私たちは以下のことを既にみてきた：伝統がここではすべてである、意志としての、純粹理性としての人間は取るに足りないものである。人間は国民の所産である、所産の文化および言語社会の巨大なエンテレキエの中で成長し、開花する唯一の現象である。ルードルフ・ハイムは、この急進的排他的な章は、1784年に『世界市民的見地における一般史の構想 *Idee zu seiner allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht*⁴²』に書きとどめたカントの諸見解に対する反撃である、と断言した。

カントにとっては本来の意味での歴史は存在しなかった、出来事は存在しなかった、そうではなくて、人間の行為だけが、意識からはがれた自由の最高の主権の意味で存在した。これは彼の倫理学である。自ら規律に服させる人間は自分の人生の形を具体化する、そして人間の総和というものは人間共通のかたちを具体化する。法はカントにとっては個人と全体の中にある情熱の制御者である、すなわち情緒の闇の衝動を制御する意志と能力は、個人の道徳的な努力に基づいて、人間の共同生活を、なごやかに影響する且つ公正なあらゆる要求を満足させる機械装置に仕立てる。“人間は主人を必要とする動物である”。この文章をカントは彼の倫理学とそこに聳え立つ国家論の基盤として述べていた。どのような激情をもってヘルダーはこの文にいらだっているのか、ハイムがそれを証明している。“人類史の哲学のためにはなるほどそれは軽い、しかし悪い原則である”つまり人間は“主人を必要とする動物である・・・その文をあべこべにすると、主人を必要とする人間は動物である”。これは、ヘルダーの生まれつきの感性がとらえていることである。彼が絶対に我慢できなかった彼自身を激昂させる内面的性質の分裂がそれである。彼は、人間社会の基盤を形成する両親の愛・夫婦の愛・子どもの愛の自然で深い感覚が腹蔵のないように、直接的に感情的に人間の心を動かすものは郷土への・歴史への・すべてへの愛であると説明している。ここで響きわたっているものは、ビュッケブルク時代からの音である。

しかしそれでもカントの批判は、全時代精神の影響としてヘルダーにききめがなかったことはない。伝統の影響力についてのヘルダーのまさしくやっかいな考え方を⁴³、カントは論評の中で鋭く批評した。彼はヘルダーの見解を宗教的神秘主義と名付けた、またヘルダーという人間を、法則どおりに認識できる自然の軌道の外を常に片足で歩く、さずらい人と名づけた。この批判の結果は明確に『イデー』の第3巻と第4巻の中にあらわれている。カントの意味における精神と自然の、区別と対置を、ヘルダーはここでは実行しなかった、そうではあるがしかし、十分な優位性を前者の形成（する能）力の側にもたらした。

ヘルダーは『イデー』の第2巻の中で、“わたしたちの幸せは、輝くアイデアよりむしろ静かな感情だ”、そして“生きることの愛と喜びをもって私たちにこたえてくれる心の感性は、思慮深い理性の影響力より、はるかに以上のものである”（XIV, 373）という文を書き表したので、その結果、第3巻と第4巻の中での人間性の概念は非常にすぐれた合理主義と主意主義を獲得した。「神は、わたしたちの勤勉、わたしたちの悟性、そしてわたしたちの能力を介して、わたしたちを助ける」（XIV, 213）、そのような文面はそれから先の作品の典型である。それゆえ伝統の概念、つまり歴史的状況の発展の中に

人間がはめ込まれてある存在はここでは修正されている。「伝統はそれ自体卓越した、^{unser Geschlecht}わたしたち人類にとって不可欠な^{Naturordnung}自然秩序である。伝統の概念は実践的な^{Staatsanstalt}国家施設においても、授業においても、すべての思考力を魅了するやいなや、新しい状況および時代に^{Menschenvernunft}応じた人間の^{Verbesserung}理性の進展と改善を妨げる：それゆえ伝統は精神の^{Opium}真のアヘンである」(XIV, 891)と、ヘルダーは諸語と述べている。

いまや歴史的な^{Traditionsgedanke}伝統思考の^{Funktionen}写像、^{Schicksalsgedanke}宗教的な^{Nation}運命思考の^{menschliche Art}写像は——わたしたちも言及したように——ヘルダーにおいては^{Nationalitätsidee}国民である。ヒューム的な意味で^{Relativismus}人間のやり方の^{Kapitel}相対主義を代表している段落中では、^{Einzigartigkeit}国籍という^{Volkscharakter}着想は、当然のこと・必要なこととして、この理論から発展してきた。のちに公表された第2巻のテキスト中では見当たらない(比較 序論 XIII, 464)章の中で、ヘルダーは、^{Abgeschlossenheit}国民という^{Abgeschlossenheit}比類なさと、^{Abgeschlossenheit}民衆性の^{Abgeschlossenheit}完成を、彼の疾風怒濤時代と同じような^{Abgeschlossenheit}迫力で強調している。しかし『イデー』の第3と第4の部分で、国民はより際立った^{Rationalismus}合理論によって^{Rationalismus}変化している。国民は自らを^{Rationalismus}解明できることからは^{Rationalismus}遠くにあるが、もはや^{Kulturleben}文明生活の^{das absolute Gefäss}全方向を向いた^{das absolute Gefäss}完全に^{Irrationalismus}主観的な^{Irrationalismus}人間存在の^{Irrationalismus}絶対的な^{Irrationalismus}容器ではない。1774年のまったく^{Irrationalismus}無条件の^{Irrationalismus}非合理主義の意味での^{Irrationalismus}人格ではもはやなくて、そうではなくて、^{einheitliche Gesetze}合理論をもってヘルダーには^{einheitliche Gesetze}客観的基準の^{einheitliche Gesetze}考えが生じている、つまり^{einheitliche Gesetze}統一的な^{einheitliche Gesetze}法則——世界を^{einheitliche Gesetze}支配する、そしてその^{einheitliche Gesetze}力と^{einheitliche Gesetze}存在価値が^{einheitliche Gesetze}すべての^{einheitliche Gesetze}主観的^{einheitliche Gesetze}生活の意味よりも^{einheitliche Gesetze}大きい^{einheitliche Gesetze}統一的な^{einheitliche Gesetze}法則——の^{einheitliche Gesetze}考えが生じている。ヘルダーは1774年にもつぱら^{einheitliche Gesetze}ギリシア人、^{einheitliche Gesetze}エジプト人、^{einheitliche Gesetze}ローマ人について^{einheitliche Gesetze}話したが——かれらの^{einheitliche Gesetze}世界は^{einheitliche Gesetze}互いに^{einheitliche Gesetze}まったく^{einheitliche Gesetze}相容れない^{einheitliche Gesetze}ものである——ここでは^{einheitliche Gesetze}国民の^{einheitliche Gesetze}形態は^{einheitliche Gesetze}変化している。国民はもはや^{einheitliche Gesetze}単純な^{einheitliche Gesetze}集団^{einheitliche Gesetze}個体ではない、1774年のように^{einheitliche Gesetze}主観的^{einheitliche Gesetze}できつい^{einheitliche Gesetze}表現でない、そうではなくて、ここでは^{einheitliche Gesetze}人間の^{einheitliche Gesetze}一部で、^{einheitliche Gesetze}人間として^{einheitliche Gesetze}共通の^{einheitliche Gesetze}理想の^{einheitliche Gesetze}完成に^{einheitliche Gesetze}関与する^{einheitliche Gesetze}仲間、^{einheitliche Gesetze}客観的な^{einheitliche Gesetze}規準と^{einheitliche Gesetze}目的の^{einheitliche Gesetze}実現のために^{einheitliche Gesetze}一緒に^{einheitliche Gesetze}働く^{einheitliche Gesetze}協働者である。“人間の^{einheitliche Gesetze}悟性の^{einheitliche Gesetze}純粋に^{einheitliche Gesetze}混乱した^{einheitliche Gesetze}問題”は^{einheitliche Gesetze}存在する——そのようにヘルダーはここで^{einheitliche Gesetze}述べている——“そこで^{einheitliche Gesetze}問題は^{einheitliche Gesetze}解決されていない、あるいは^{einheitliche Gesetze}よりうまく^{einheitliche Gesetze}解決されるという^{einheitliche Gesetze}恣意的^{einheitliche Gesetze}文芸作品は”^{einheitliche Gesetze}存在しない。あるべき^{einheitliche Gesetze}問題の^{einheitliche Gesetze}純粋な^{einheitliche Gesetze}概念は^{einheitliche Gesetze}もっとも^{einheitliche Gesetze}簡単な、^{einheitliche Gesetze}みごとな、^{einheitliche Gesetze}美しい^{einheitliche Gesetze}やり方で^{einheitliche Gesetze}論じつくされた。それら^{einheitliche Gesetze}(諸問題の^{einheitliche Gesetze}諸解決)の^{einheitliche Gesetze}いずれの^{einheitliche Gesetze}混乱も^{einheitliche Gesetze}誤りであろう(XIV, 229)。

課題に対する^{einheitliche Gesetze}決定的^{einheitliche Gesetze}模範^{einheitliche Gesetze}解答の^{einheitliche Gesetze}この^{einheitliche Gesetze}着想は——^{einheitliche Gesetze}課せられた^{einheitliche Gesetze}内容を見^{einheitliche Gesetze}いだす^{einheitliche Gesetze}ための^{einheitliche Gesetze}純粋な^{einheitliche Gesetze}形式に基づいて——^{einheitliche Gesetze}古典主義^{einheitliche Gesetze}作品の^{einheitliche Gesetze}理想像を^{einheitliche Gesetze}思い出させる。それらの^{einheitliche Gesetze}印象により、ヘルダーはあの^{einheitliche Gesetze}当時には^{einheitliche Gesetze}非常に^{einheitliche Gesetze}人気があった。とはいえ彼の^{einheitliche Gesetze}考えはこの^{einheitliche Gesetze}場合^{einheitliche Gesetze}断じて^{einheitliche Gesetze}独力で^{einheitliche Gesetze}審美的な^{einheitliche Gesetze}ことに関係している^{einheitliche Gesetze}のでない、^{einheitliche Gesetze}正反対^{einheitliche Gesetze}である。彼と^{einheitliche Gesetze}同時代の^{einheitliche Gesetze}人たちは^{einheitliche Gesetze}ほとんどの^{einheitliche Gesetze}思想のように、ヘルダーの^{einheitliche Gesetze}思想は、あの^{einheitliche Gesetze}当時^{einheitliche Gesetze}国家の^{einheitliche Gesetze}権力^{einheitliche Gesetze}分配の問題に^{einheitliche Gesetze}強く^{einheitliche Gesetze}かかわっていた。これこそがヘルダーには^{einheitliche Gesetze}いちばん^{einheitliche Gesetze}重要である^{einheitliche Gesetze}ように^{einheitliche Gesetze}思われた、そして、^{einheitliche Gesetze}着手された^{einheitliche Gesetze}フランス^{einheitliche Gesetze}革命は^{einheitliche Gesetze}当時の^{einheitliche Gesetze}大方の^{einheitliche Gesetze}ドイツ^{einheitliche Gesetze}人詩人を^{einheitliche Gesetze}巻き込んだ^{einheitliche Gesetze}ように^{einheitliche Gesetze}ヘルダーを^{einheitliche Gesetze}渦の中に^{einheitliche Gesetze}巻き込んだ。いちだんと『イデー』の中では^{einheitliche Gesetze}完全に^{einheitliche Gesetze}革命的に^{einheitliche Gesetze}民主主義^{einheitliche Gesetze}な^{einheitliche Gesetze}急進主義^{einheitliche Gesetze}の^{einheitliche Gesetze}宣伝活動、^{einheitliche Gesetze}ルソーの意味における^{einheitliche Gesetze}民衆の^{einheitliche Gesetze}自己^{einheitliche Gesetze}決定の^{einheitliche Gesetze}思想に出^{einheitliche Gesetze}くわす。そして^{einheitliche Gesetze}フランスへの^{einheitliche Gesetze}追随によって、^{einheitliche Gesetze}国籍という^{einheitliche Gesetze}着想の^{einheitliche Gesetze}無条件に^{einheitliche Gesetze}主観的な^{einheitliche Gesetze}欲求のみではなく、その^{einheitliche Gesetze}欲求の^{einheitliche Gesetze}熱烈な^{einheitliche Gesetze}激しさも^{einheitliche Gesetze}当然損害を^{einheitliche Gesetze}こう^{einheitliche Gesetze}むった。ヘルダーはこの^{einheitliche Gesetze}点では^{einheitliche Gesetze}平和主義者^{einheitliche Gesetze}だった。歴史は彼にとって、この^{einheitliche Gesetze}点では^{einheitliche Gesetze}本当に^{einheitliche Gesetze}一貫した^{einheitliche Gesetze}精神の中で^{einheitliche Gesetze}且つ^{einheitliche Gesetze}すべてを^{einheitliche Gesetze}包括する^{einheitliche Gesetze}公正をもって^{einheitliche Gesetze}同行した^{einheitliche Gesetze}人類教育であ

る。現世は一つの学校である——そのように彼はその考えを述べている——諸国民は、様々な責務を神つまり現世の教師から与えられる諸クラス（学級）である。彼の疾風怒濤期には、精神的個性の徹底的・激情的展開のみが彼には重要だったので、その結果についてはどうでもよかった。ここではヘルダーは歴史における予定調和を信じ、人間および民衆の現世での至福を強調している。至福は妨害される、勇士や暴君によって——彼はそれを広範囲に攻撃的な論述の中で描写している——信頼している人たちを利己目的のために利用する、生まれつき備わっている権利を人びとから奪いとる、勇士や暴君によって、妨害されるだけである。（XIV, 215/16）

ヘルダーの考えはこの作品の中でいちだんと国家の問題に携わり始めた。フランス人民衆の思想と実践の計画をもって国家を手に入れると信じていたように、国家を彼の世俗理解によっていよいよますます包括的にまた原則的に把握しようとしたように、たしかに国家の、である。それはいまや彼の見解なのである、そして様々な思想の側面を物語っている：政治的才能のあるフランス人の国民がちょうど実践的なやり方で創造しかかっていること、それを哲学的につくり上げることがドイツ人の課題だった。

IV ヘルダーの国家に対する姿勢

1) シュトルム・ウント・ドラングの時代

いまやヘルダーの国家についての考えと取り組むとき、彼の世界観の土壌からは政治的に明確な概要をもつ基本政策を期待することはできないのは明白なので、しばしば揺れ動く且つ矛盾している意見の陰にはっきりと存在する性向と思いつきをつきとめることだけに関心をもとう。

ヘルダーの人間性の理想像はカントの影響下で二方向に分裂したのが分る。合理主義的・行動主義的な諸理想像に取り組むこと、自由を求める自己決定の諸理想像に取り組むことは、宗教的に知覚された自然主義になった。おまけにそれらはフランスの政治的な動きから始まり、そしてその時代を満たした。この対立はとくにヘルダーの国家への態度表明において現われている。さらにここでは二つの矛盾、ヘルダーに肯定的な帰結を手に入れさせない矛盾が闘っている、しかしそれでも国家の問題に対する彼の態度表明の考察は意味がないわけではない。その考察がわたしたちに締めくくりの見解を与えないとしても、それに応じて人間性の哲人に傾向する政治的理想像の見解が見える。

根本的にはヘルダーの国家という着想にはいつも宗教的自然主義が存在している。それはいつの時にも国家思想に決定的な特徴を与えた。すでにヘルダーが啓蒙主義の合理論の影響を強く受けていたある時期に作られた1769年の若き日の作品『私の旅行記 *Journal meiner Reise*』の中で、以下の考えを述べているのに出くわす：国家は形而上学的・精神的に確固として与えられた事実の明白な組織および均衡である⁴⁴。ヘルダーはここでは国民を、身体と、そして国民の憲法を、身体に強靭さを与える引力と反発の諸原則と、比較している：詳細に言えば、国家を率いる各政府の本質と責務は、計画を風俗・習慣・そして人物像に集結すること、可能なかぎり高尚な表現に高めることだけである。自然に完全に依存する組織としての国家の——1774年の論文の中ではよ

それが彼の原則である。そしてわたしたちはヘルダーに強い影響を及ぼした一冊の本の中でこの原則が具体化されているのが分る。トーマス ブラックウェルの1735年の著書『ホメロスの人生と著書についての考察 *Equiries into the Life and writings of Homer*』である⁴⁷。その本は国民と国家の問題に携わってはいない、が、ヘルダーにとって最も近にあった同一の問いについては論究している：その本は創造力のある人間に必要な生存条件について尋ねている。ブラックウェルはホメロスから出発している。なぜホメロスの詩作天分が二度とふたたび、どこにも生まれなかったのか？ その問いに答えるために彼は当時のギリシアの諸関係を概観している、そしてちょうどその国の戦争の混乱と崩壊の中で、創造的精神にとって実り豊かな土壌を見つけた。この調査の範囲をこえて、彼はイギリスの17世紀の関係を指摘した。その中から、ひとりのミルトン⁴⁸が、革命時期の不確実性と万丈波乱からは天才だけが出現することを、原則的にまた一般的に詳述するために、出てきた。ヘルダーが宗教的土壌からでてきたように、耽美的な土壌から出てきてブラックウェルは無秩序にいきついた。

対外的な関係における非慣習、めずらしさ、そして素晴らしさは——そうかれは説明している——精神を創造することに鼓舞するものである。とくに人間的心情の中にそのような関係を生じさせる徳を“英雄主義”と彼は名付けている、そして、世の中から外れた一個人の内面的体験の灼熱の中で、また世界へ向かっての対外努力の日常的衝動の中で、この英雄主義は、ヘルダーの反国家的な、外からのすべての強制に対抗した愛、国民への愛以外の何ものでもない⁴⁹。

十年後に書かれた『イデー』の中でヘルダーは具体的な国家秩序の考えをもって闘い始めた。ますます正当化された人間性の理想像は、結局は『イデー』の終りに、わたしたちがみたように、まったく革命的で民主主義的に感じられる情熱音を発している。そうはいってもヘルダーのそのような発言は非常にきびしく調べられる必要がある。彼の総哲学との関連ではじめて、またその哲学があゝの時期に発展してはじめて、それらの発言は理解されうるものである。国家についてのヘルダーの考えを明白に整理するのは難しい。ヘルダーの考えはあまりにもはなはだしく変化する。また特徴的であるのは、ヘルダーの1785年4月のハーマン宛の手紙の一部が、政府について四回書いた章についてだったことである：“この部分の若干の箇所は”——そうヘルダーはこの点について書いている——“わたしにとって非常に骨の折れることだった、努力はわたしを満足させなかった、とくに政府の腐った頭脳・その無価値なものに、全く厄介な歴史は——イマヌエル氏と、世界史の聴衆が望んでいるように——ぶら下がっている。歴史は無価値な政府にぶら下がっている。それについての二つ目の論文を、わたしは最初の論文を自ら拒否したのちに、わたしたちの友人ゲーテに内閣が発行した大臣検閲のために渡した、そして彼はそれをわたしに慰めの知らせをさげて再びもってきた、その知らせの中には評価の言葉を見出せなかったのは勿論だ。三つ目の論文はより以上に助言をされなかった、そしてわたしは聖霊降臨祭のオーラを期待している、このゴルヂオスの結び目（難問題）をよりきちんと取り扱うために、わたしの教会決算が終ったならば”（XIV, 448）。

主要な糸、またヘルダーの政治的観点の考え方すべてによつてのびる、唯一本当に肯定

的なものは、彼の時代の絶対国家に対抗する闘いだった。情熱と力では、これらの戦いは決して変化しなかったものの中身は変化した。そこを出発点として、わたしたちは二つの時代を区別することができる。

ビュッケブルク時代における専制政治はヘルダーにとって——不毛の、抽象的な教育を与えられ、まさに日々の活動的生活への全ての能動的な参加から遠ざけられていた——大衆の平等化、啓蒙化、そして(知性偏重)主知主義化の原則を具体化している。ヘルダーは一般生活の集中化と機械化を、軍隊と官僚によって、またローマ法のますますの導入によって具体化している。ヘルダーがそのような行政と国家体制に対して投げつける悪口は極端である。戦争の使用自体にヘルダーは拒絶の態度はとっていないが、近代的軍艦の構築は拒絶している。彼はそれを、個人的勇敢さと忠誠心が現れているローマ軍と比較している。ローマ人は18世紀の兵士に何をいうだろうか?“心の底にある美德は燃えつきて消失した、軍人としての名誉の王冠は——兵士は戦士の制服を身につけた国家初の雇用人である——兵士という名誉と職業である”(V, 534)。“農民から大臣まで、大臣から聖職者まで”全員が“それぞれの職務・職業・地位の制服を着た従者である”(V, 535)。司法の国有化と集権化——それがあの時代の専制政治によってその兆しがみえたように——は、ヘルダーにとっては司法活動の道徳的作用すべての死である(V, 542)。大学、(教会の)説教壇、図書館は同様に統一的・国家的主導のために彼にとっては単に“市場”および“人類の教育のための機械”にすぎない(V, 542)。ヘルダーがこの点で絶対主義の中で闘っていることは、のちのフランス革命の諸理想像：均一性と平等である。

『イデー』の中ではじめてわたしたちは国家本来の形の国民国家の理想像をみることができる：民衆の独立と、じぶんたちの運命の調節への民衆の関与である。この点で、とくに第3巻において、伝統思想は、政治家の姿が関係しているかぎりには、人間性の理想像とは直接的に矛盾する。人間性はここでは自由と自決を意味する。“権利の所有と使用において人類が至る所で一種の人間性に成長するのがわかる”とヘルダーはここで言っている。“人間は間違いをすれば、あるいは受継いだ伝統の半ばでとどまっているとすれば、人間はじぶんたちの誤りの結果に苦しみ、そして自己の罪を償うだろう”。神は、時代、場所、そして人間に本来備わっている力による以外は人間の両手を縛ることはなかった(XIV, 210)。この点でヘルダーはさらに、自分たちの権利を擁護するすべを心得ていない民衆が、アジア諸国民のような鈍感と無精のうちにのんびりと日々を暮らす民衆が、専制君主の圧力下でどんなに苦しんだかを述べている。けれども若干数の民衆は——そのようには言っている、そしてギリシア人を指している——とっくの昔に“古い政治形態と伝統の絶対権力のくびきを”払い落とした、そしてそれによって人類の運命の偉大な、慈悲深い法を立証した：民衆あるいは人類一同は、自分の最善ためにだけは信念をもって欲する、そして力で実行する。それは、独裁君主でも・伝統でもなく、人間性の最良形を、かれらの目標と定めた“造物主から生まれつき民衆に与えられていたのである”(XIV, 211)。『イデー』はこの意味において革命への、あからさまで情熱的なアピールだった。ヘルダーの言語能力は無限である。ヘルダーは民衆に、かれらを抑圧する諸政権に対して、かれらの本当の力の自意識を呼び覚まして、かれらに、かれらが

不変に所有する人権^{Menschenrechte}を言い渡している。“けっして”——そのように彼はかれらに、あるいは他の人びとに呼びかけている——“たとえば専制主義下での長期間の服従は、専制君主の優位^{Übermacht}に基づいていたのではない；服従させられている者の従順な、信頼している弱さ、のちになっては辛抱するとかれらの怠惰が彼（専制君主）の唯一最大のよりどころだった。なぜならば辛抱することは力を込めて改善するより勿論簡単だからである”；それゆえ多くの民衆は、かれらに神が理性というすばらしい贈物を通して与えたこの権能^{Recht}を必要としなかった。地上^{auf der Erde}でまだ生じてはいないことが今後生じるのは疑いのないことである：人間の権利には時効の適用はない、また、神が人間に与え備えた能力は消すことのできないものである。わたしたちはギリシア人とローマ人が数世紀間にそれをかれらの現在の領域にもたらしたことに驚く（XIV, 212）。この二つの古代の民衆が“運命に保護されて”達成することだけが目標だったことは、ここでは明白には言及されていない。しかし次に述べる詳細の内容は、それは共和国の時代^{Epoche der Republik}、“真の国家理性”の具体化——それをもつばらヘルダーはここでは考えている——であることを明確に示している。というのは、歴史的な“自然の法則”^{Naturgesetze}、つまり歴史自体の内面的発展が諸国民^{Nationen}を真の理性に、国家理性に導き、それによってこの世^{auf Erden}で“植えつけられた神の力をもちいて混乱状態から秩序ある状態になる”ことを意味する自然の法則の作成が、いまやあとに続いている。（XIV, 214）。“人間の過ちのすべては真実のもやである。胸中にある情熱のすべては、自分自身まだ分かっていない力の、天性に応じてよりよいものに影響を与えるだけの力の、自然のままの行動である”（XIV, 215）。したがって、これらの誤りと情熱の具現化は、“狼たちと虎たち”と同じように人間界に居住する（XIV, 216）^{Heiden und Tyrannen} 勇士と暴君である。人類の自己発展はみずから勇士と暴君に打ち勝ち、それを根絶した。いまや国家における人間の存在は——かれらの繁栄の基盤および“かれらの繁栄の永続的な状態”である——“理性と公正”^{Vernunft und Billigkeit}の上に築かれる。理性と公正のこの力は自然法則に基づいている。そしてそれゆえ人は歴史生活を、“ユークリッド計算の九九”のように、“数学的確実性”^{Calculus}をもって、政治的打算をもたすことができる。（XIV, 216）。

これらの説明以上のことは、わたしたちは国家形態に関するヘルダーの明白に述べられた信念^{Glaubensbekenntnis}にでくわさない。しかし彼の講演の情熱はフランス革命の雰囲気すべてを伝えている。彼はフランス革命に——ハイムが証明した事実——あの時代に熱く感化されていた⁵⁰。これらの影響から、ほんのわずかで国家の敵ヘルダーの口から次の文が出ている：“よく手入れされている国家の民衆は滅亡しないだろう；打ち勝つことのできるように民衆は身を置け”（XIV, 224）。

わたしたちは以下の問い：ヘルダーは本当にこの時代にヨーロッパ西部フランスの民主主義的なイデーの信望者だったのかという質問には、条件付で肯定できる。

カントはドイツの形式民主主義の偉大な哲学の代表者であり、ヘルダーではなかった。カントにとって国家は法に基づいている⁵¹。法がつくりだす拘束をかれは定義づけている、つまり一国家の人民は、自己認識と自己規定を顧慮する目的を適切に表現した“共有する約束”^{Bürger}に基づいている。国家はカントにとってすでに人間の所属決定の実現である、国家には道徳的な中身が本来備わっている、国家が個人に“強要のこの状態”に入ることを強制

する場合には、すなわちカント自身が補足しているように、人間に強要されている^{ein Gehege}“獵区”に入ることを強制する場合は国家には道徳的な中身が内在している、それは“森の中の木々が、それぞれの木が他の木から空気と太陽を奪おうとする試みによって”“自分の上にある空気と太陽をさがすことによって、うつくしい、まっすぐな成長を手に入れる”のと同じだ。

ヘルダーはそれとは反対にこの形では国家という考え方^{Staatsgedanken}を決して承認しなかった。それどころか彼は『イデー』の中でカントの解釈に対して極端に反乱さえも起した⁵²。彼がこの点について書いていることは“人間は、わたしたちがここで分かるように・・・人間の目標として国家のためにつくられている”とは“どういう意味なのか” (XIII, 338)。そして『ヒューマニティー書簡 *Humanitätsbriefe*』の中で彼は個人主義的な至福論に固執している、そして全構成員の“個々人の幸福の全体は”——そうかれはここで言っている——国家の幸福である (XVII, 183)。個人と、個人の幸福は、ヘルダーにとって依然として唯一の目標である。共同体としての国民^{Gemeinschaft Nation}——そうわたしたちはみてきた——は、この高揚した個人主義に基盤を提供することができる、国家はできない。ヘルダーは『イデー』の中で“国家”という言葉^{Gesetz und allgemeine Ordnung}を著しく頻繁に肯定的な意味で使用した可能性はある、法および普遍的組織としての国家——これらはまたいわゆるルソーの“共有意志”^{gemeiner Willen}によって、カントの共通の“取り決め”^{Verabredung}によって成立するのであろう——は、ヘルダーの念頭にはない、なぜならこの国家すら“個人の幸福のすべて”をもくろむことはできない、単に全体の平均的幸福しか目論めない。“理性と公正”の規則はそれゆえヘルダーにおいては要するに国家の諸制度^{Saatsinstitutionen}の基礎ではない、そうではなくて基礎は——これをすでにヘルダーの理想の人間性像の考察によって前章で見たように——宗教上の信仰の中身である。基礎は自然法則^{Naturgesetz}である、詳細に言えば、人間の認識の様ざまな描写の中で^{das Weltall}万有を支配するたった一つのものである。それは、物質的な世界では物事における“内面の均衡”^{innere Gleichgewicht}の規則で、道徳的な世界では調和の本質^{Harmonie}である、その調和の本質に全世界は基づいている。(比較. XIV, 234)。

ヘルダーは、このバランスの原則、人間性の原則が道徳的世界をどのように支配しているかを描写している。賢い商人は——そうヘルダーはいう——ヨーロッパの賢君主がペルシア王の絶対権力をもって自分の行政区域を管理するのと同じくらい裏切らないであろう。世界の内面的発展の進行は、国家の無分別はそれぞれ、自分の無分別を恥じることを学ぶということである。また行政の間違い^{Staatsunvernünftige}すべてもまたそのうちに汲みつくされるだろう。諸民衆は真実と理性によってのみ支配されるだろう (XIV, 225)。

世界を形成しているこの人間性は共有財産^{Gemeingut}でありえないことは何の問題もなく明白である。人間性はとりわけ人間の取決めによって実現できるのではない、人間性の認識は指導者と予言の素質を必要とする。それゆえにヘルダーは革命のような感激の真ったなか^{Führer Prophetennaturen}でさえ、『イデー』の中で、“この自然法則の管理人”、指導者、“善良な現人神”^{Menschengott}であるべき理想の指導者を指摘することには欠けていない。

西の政治的出来事と革命理論^{revolutionäre Theorie}はヘルダーに強く影響した。しかしますます深く、そしてますます本当のところは確かに二つの異質の力が彼を内面的に支配した：古代ギリシア世界とキリスト教の表象世界である。両方において同じように彼は理想的な自由のための手^{Freiheitsideale}がかりを見つけた。キリストの教えの精神を、『イデー』の中ではっきりと、教会が後

につくりあげたことと矛盾して“きょうだいの融合と許し”“真の友情ときょうだい愛”の精神として、表現している⁵³。さらに、わたしたちは、古代ギリシア文化の描写の中で、どのようにしてギリシア共和国を見ることが、政治的な自治と、全国民同胞たちの国家への政治参加に対する感激をヘルダーの心を実現させた云々をわたしたちは観察した（比較1418）。しかしそうはいっても両方の文化力Kulturmächteの中に、キリスト教と同様ヘレニズム世界の中にも、それ自体、またヘルダーにとっては、超経験的な且つ標準的な考えが、含まれている。キリスト教の道德の特徴と同様またギリシア文化の特徴も、個人に、よりいっそう高い理想を浸透させることにある。そしてヘルダーの古代の描写同様またキリスト教の描写においても、わたしたちはこの考えが現れるのがみとれる。聖書の地では、国家を支配し群衆を導いたのは、聖職者と預言者Priester und Prophetenだった。そしてまたギリシア人においては、それは自然が産み出した“若干数の偉大な男たちの”精神である。ギリシア人の文化生活の高さは、かれらのおかげである。（XIV, 117）。

“民衆と専制君主は少なくとも運命の女神の忠告する合図を理解している”（XIV, 232）とヘルダーはかつて言っている。たしかにこの文章からは、彼の望みは両極端の真ん中へ、貴族制国家Aristokratieへ傾いているとは言えない。まさにこれらの国家形態については、彼はギリシアの状態描写の中で厳しい言葉で述べている。“いまや確かに”——そうかれは書いている——王政崩壊後の“新しい統治機構が最良の統治機構であるとは言い切れない、王のかわりに、ほとんどいたるところで高貴人および権力者たちが支配した、その結果、多くの都市で混乱はよりいっそう大きくなり、民衆の抑圧は耐え難いものになった”（XIV, 118）。

ヘルダーは彼を浮かせた理想像、理想の確固たる政治形態を一度たりとも見いださなかった。彼の努力の目標は政治的なものの向こう側にある、ただ“国民”Nationだけはそれを正当に評価できる。言語および文化の組織体として⁵⁴、国民は、ヘルダーの歴史哲学が追及している個性と理想の和である。ヘルダーはギリシア人について、国家と国民に対するかれの姿勢Stellungを特徴づけることばを述べている。多く分割されたこと、自由、そして国民の国家生活staatliches Lebenの活動性によって、“各部族に遺伝的に継承されている風俗文化は政治的になった”。（XIV, 317）国家はヘルダーにとっては象徴Ausdruckのままである、そして国家活動は心理学的な盗聴、教育的な覚醒および指導のみである。なぜなら国民は自然と同じである、自然は神が与えたもの、神が織りなしたものである。それは、認識され、形づくられることはできても、暴力的に押さえつけられるものではない。

V ヘルダーの当時の政治への態度表明Stellungnahme

前述の観察はヘルダーの国民の概念の像を、哲学的意味において提供した。ヘルダーの態度決定の研究が政治的な状況や出来事と取り組むとき、筆者の意図には、ヘルダーの政治的な判断と努力の極めて詳しい描写を与えるということは存在しない。なぜなら、非政治的精神のもとでは、意見は揺れ動き、変わり、そして折に触れて反論することは問題なく明らかである。彼の見解の総意から意志の大きな部分をよみとることと、ヘルダーの一般的に扱われている歴史哲学がどのように実践的生活への態度表明と一体化したのかを理解することだけにかかわる問題である。

ヘルダーはプロイセン人だった。しかし、長いあいだ、彼は一般的にプロイセンの政治にもフリードリヒ大王にも、精神的なつながりを見いださなかった。1769年に『私の旅行記』で彼は“プロイセン王の諸邦”について述べている。彼は七年戦争終結の六年後ですら一まとまりとしてのプロイセン祖国を知らない。彼はこれらの諸邦に関して述べている：“諸邦は幸せではあれない、それらが親睦的に分割されるまでは” (IV, 405)。イエガーフォン ジーフェルスはこの言葉を、のちの帝国統一の形態への予言を既に含んでいるかのように解釈した⁵⁵。彼はそれに加えて、ビスマルクが実現させようと思っていたらしい“重要な言葉”^{ein grosses Wort}に気づいている。もっぱらこの推測だけが極めて大胆にあらわれているようである。反対の考え、ヘルダーは統一的でまとまった権力国家としてのプロイセン——ビスマルクはのちにそこを出発点としている——を認めなかったこと、だからそれゆえヘルダーが“分割”^{Zerteilung}によってドイツにおける個々のプロイセン行政区域の開花^{Aufgehen}を欲するのは、より自然である。すなわちヘルダーはこの姿勢でシュレジアについて話すことを続けている：“彼のシュレジアとは一体何か”——そのように彼はフリードリヒ大王のことを言っている——“どこに彼の帝国^{Reich}が残るだろうか、どこにピュロス^{P'yrrhos}の帝があるだろうか。彼はこの者と少しでも類似性をもっていないのか”。ヘルダーはフリードリヒ大王をマキャベリの意味において泥棒侯^{Raubfürst}として理解した。1774年の著書の中で、ヘルダーは彼をフィレンツェ人の“原則”^{Prinzip}と比較している、そしてフリードリヒを、自らの本当の政治の野蛮な動機を公言する勇気をもっていなかったのでフィレンツェ人よりもよろしくないと評価している。ヘルダーはここで反マキャベリを話題にしている。“なんという本”——そうかれは言っている——“その本のように考えているなんという皇太子か。補償し、承認し、情報をもっていただけの、付随的な物の考え方の中で、現世と後世のために行動しただけの”なんという皇子か！粗野な非人間的な残酷な愚行の代りに、圧迫感を与えながら有害である病気がはやった、なぜなら病気は足音を忍ばせて歩く、褒められもせず、認識もされず、そして骨の髄まで魂をむさぼるから。哲学と人間愛^{Menschenliebe}の普遍的な衣は抑圧を隠すことができる、真の個人の人間の自由、そしてラントの自由、市民の自由、民衆の自由等々の侵害を隠すことができる。ヘルダーが第一にフリードリヒ大王に対して起こした非難は——わたしたちはすでにそれをみてきた——シュレジアの征服である。1778年に受賞論文『古い時代と新しい時代における民衆の風俗への文学の影響について *Ueber die Werkung der Dichtkunst auf die Sitten der Völker in alten und neuen Zeiten*』の中でその言葉を書いた。“わたしたちはドイツ人だ、そしてそれを手に入れたとき、わたしたちはまた再びドイツ人ではない、そうではなくてブランデンブルク人、シュレジア人、ザクセン人、シュヴァーベン人、そしてバイエルン人である”(VIII, 425)。“なぜ”——そのように彼は別の箇所で行っている——“たとえばグライムのプロイセンの歩兵がプロイセン人だけであらねばならないのか”。それはドイツ人がドイツ人を敵にして戦う戦争における“彼の苦い答えである” (VIII, 430)。ドイツ人の兄弟喧嘩^{Brüderzwist}のこの有罪判決^{Verurteilung}は非常にすげなく——兄弟喧嘩と、ヘルダーはシュレジア戦争を感じていた——1762年に現れた。十八歳の若者は当時、ピョートル三世が即位するやいなやプロイセンに対する戦争を中止した時、ロシア皇帝への詩をつくった。その中で彼はこれらのことを神の召喚として賛美するだけでなく、プロイセン王の政策に対して

厳しい言葉を述べている。ピョートル三世はむしろ賠償の要求をせず捕虜を返すことを甘んじて受けた⁵⁶。この事実、フリードリヒ大王に狙いを定めたその韻文は、関連している。“その者は、王たちの血の付いた剣を剣帯から外す／そして名誉と幸運が舞う／かれの英雄たちの上に、敵はかれの権標を返却する／最初の羊飼いに、快く。”

それらの詩句はモールンゲン（モラーク）の牧師補^{Diakonus Trescho}トレスコ——ヘルダーは当時トレスコによる重圧下で生活していた——の家で書かれた。ヘルダーの青年時代の考え方^{Denken}の著しく宗教的な傾向、フリードリヒ大王・軍事国家の君主に対する憎悪、小国家の暴政^{Despotie}の写しのように思われた日常生活の不正に対する憎悪は、ロシア皇帝の像を最高によく見せるために、根拠を失う。そして、実際は、それは数年後にリガだった、“リガ——ロシアの庇護下でまるでジュネーブ——”（1765年6月27日のリガのドーム学校での就任講演）⁵⁷。リガはヘルダーにとって初めて満たされた自由な創造の幸運が持続した場所である。この時代からロシアに対する愛とロシア主義がヘルダーの生涯を通して大きくなる。それは決して消えることはなかった。

1769年の『私の旅行記 *Journal meiner Reise*』の中で、彼はヨーロッパの幾つかの民衆^{Völker}を内面的な目でチラリと眺めている。ロシアの屋台店で、ウクライナで、彼の眼差しは釘付けになっている。ウクライナのことをヘルダーは、そこは新しいギリシアになるだろうと言っている。“この民衆^{Volk}の美しい空、かれらのゆかいな存在、音楽的な天性、豊かな土地等々は必ずや深い眠りから覚めるだろう。：ギリシアでもかつてそうあったように、そんなに多くの無名の野生的な民衆から、礼儀正しい国民^{Nation}ができるだろう：かれらの諸境界は黒海までのびるだろう、そしてそこから世界に広がるだろう”（IV, 402）。ウクライナから、ヨーロッパの政治的な精神生活の変化が起こるであろうと、ヘルダーは夢みている。ひとはこの点で、どんなにまたスラヴ人へのヘルダーの信仰が、彼の哲学の宗教的、形而上学的傾向と結びついているかが分る。わたしたちは、国民自体ヘルダーにとっては、かれらを一種の神が望んだ運命によって互いに調和させる、人間の固い共同体^{Gemeinschaft}であると分かった。そして——とくにヘルダーの若い時期に——合理論主義の文化に対する反乱、この“国民”の機械化された国家運営に対する反乱が一緒に考えられていたことが、分かった。『旅行記』に引用された箇所では、まさにこの刺激が、スラヴ人民衆の未来を信頼していたヘルダーにいかに関係を及ぼしたかが分る。スラヴひいきの夢と関連して、ヘルダーは西ヨーロッパの宗教的精神と根本的にとりくんでいる；かれは言う：われわれの宗教は寛容^{Toleranz}によって、洗練^{Verfeinerung}によって、進撃^{Anrückung}によって、たがいに共有の理神論^{Deismus}のために眠るがごとく消滅するであろう、すべての見知らぬ神々を受け入れるローマの宗教のように：荒れ狂う強さは消滅し、そして地球の片隅から別の民衆^{Volk}が生まれる”。（IV, 402）この民衆はしかし——そのようにこのときヘルダーは思っていた——スラヴ人である。『イデー』の中で彼はそんなに詳しくはこの思想を取り上げていない。しかし彼はここでもスラヴ人の偉大さと多様性を描写している、また、かれらはそれまで単に政治性が欠如していたために繁栄しなかったただけだと付け加えた。その際になにはさておき、まずはドイツ人に、ヘルダーの非難は向けられている。“多くの国民^{Nationen}たちが、しかし大部分は、ドイツ人の諸部族が、その民衆に対して不正を働いた”（XIV, 279）。

1802年の5番目のアドレスティアの一項“民衆の迅速な芸術教育について *Ueber die schnelle Kunstbildung der Völker*”の中で、この論文は当然ドイツ人のペンによる汎スラヴ主義の企画と名付けることができると、ヘルダーはロシア空想を精力的に再び始めている。汎スラヴ主義^{Panslavismus}と汎スラヴ主義の後のロシア代表者のようにヘルダーはこの時点ですでに真のロシアの国民性^{Nationalcharakter}の純粋維持を支持し、そして外国の習慣をロシアに移入しようとしたピョートル大帝の政治に反論している (XXIII, 451)

国籍^{Nationalitätsidee}という着想の中で、ヘルダーは領土内部でのロシアの伝統を純粋に維持することを擁護している、しかし対外政策に関してロシアの将来について取り組み始めた時、彼のドグマは、国民性^{im nationalen Charakter}をもつ民衆の平和的の共存によって慎重に揺り動かされている。なるほどヘルダーはロシアに世界の中での位置と境界を教えるつもりである。ロシアはヘルダーにとってはヨーロッパとアジアを結びつける帝国である。この帝国が、第二次対仏大同盟戦争において生じたように、“小さな西ヨーロッパの貿易に口出しする”ことに、反対だとヘルダーは強調している。“その結果、アルプス山脈のふもとのロシア人兵士たちはロシアに埋葬された、二度と再び起き上がれないように” (XXIII, 449)。しかしヘルダーが将来のロシア帝国に対して設定する権力範囲は本当に不気味なものである。“ボスニア湾を除いて、どの海をロシアは本当に要求するのか”とヘルダーは尋ねている。“白海と同じように黒海、氷洋、カスピ海、アジアとアメリカの海を”というのがヘルダーの答えである。彼は1792年のヤーシ条約において黒海沿岸を手に入れたエカチェリーナ二世の政治に感激し、そしてロシア帝国が一度は手に入れるにちがいない拡大による理想^{Idealische Traumkarte}的な夢の地図を作成している。それは既述したように、東は太平洋まで、西はコンスタンティノープル - 小アジア、ギリシア、そしてギリシアの小さな島々を経由して地中海まで延びる、そしてこの基盤からロシアは“世界を平和的に要求する”という”。ひとはヘルダーのこの論文を詩的空想の作品としてのみ解釈すべきで、ドイツ^{das Deutschtum}気質に対抗する政治的な案として考えてはならない——すでに1798年以降ヘルダーは、ロシアとフランスに対抗する自己防衛への強調をもって、ドイツに呼びかけ始めた——ともかくこの時代はスラヴ人に対する深い賞賛をもって、そして現世での彼の主張のために強い意志^{Willen}をもって書かれているので、その結果、ヘルダーがそれによって汎スラヴ主義に及ぼした影響が大きかったことはなんら不思議なことではない⁵⁸。はやくも1774年の歴史哲学は、ピョートル大帝をグスタフ アドルフとルターと並んで世界史の最も偉大な人物と名付けていた。この論文は、偉大な君主に記念碑^{Denkmal}を立てるという、過去への記憶のためだけでなく、将来に対する警告^{Mahnung}を意味する記念碑を立てるという計画をもって終っている。ロシア皇帝は勇士の王冠と、市民王冠のオークの葉で編んだ輪飾りを同時につけて描写されるという。“彼の傍らに”その“ロシア驚は爪の中に電光を”。彼の居場所はロトンデ扇形庫である、その中で彼はミューズの女神たちのあいだに立っているアポロ神のように、彼の末裔たちのあいだに立っている、その先頭に、彼に向き合っ、エカチェリーナ二世が立っている：“世紀の歴史はこのロトンデを半分完成し、あとの半分はきたるべき時代に残している”。絶えず新しい文化、彼の感受性にとってある程度純粋で、そして無限の創造者の体内からとぎれることなく発する精神力、彼の関心、そして彼の希望がたえず自分自身と関係づくことは、ヘルダーの考え方の特徴

である。彼は理想的な夢の地図の、この帝国の終りなき拡大の中に土壌を見つけた、その土壌から、まだまどろんでいる東部の覚醒によって、全く新しいよりよい精神生活が生じる：同じ意味で彼は1780年に英 - 米植民地の自由のための戦い^{Freiheitskampf}に歓声を上げている (IX, 336)。そして単に精神的な要求から、宗教的な要求から、芸術的な要求から生まれた物の考え方も、彼にドイツへの関係のみを与えるものである。ドイツもまた寸断された国の連合から、確固たる統一した精神力にほんとうはなるべきである、存在と言語を世界で貫徹することのできる権力^{Macht}になるべきである。この目的のためには、現実の政治のやり方が必要であるということ、ヘルダーは十分に分っていた、そして認めていた。しかし、個人において同じようにあるということに彼は重きを置かなかった。彼はその偉大なプロイセン君主に長いあいだ不信を抱いた。プロイセン君主がこの大きな目標への道を見つけるだろうということに不信を抱いた。わたしたちは、ヘルダーがシュレジア戦争に反対して掲げたプロテストのことを聞き知っている。しかし純粋に精神的な関係においても、彼にはフリードリヒ大王は国民の勇士としても、彼が熱望していた偉大なドイツ人の人物^{Personlichkeit}としても映らなかった。先述した国家についての観察において、わたしたちは諸侯^{Fürstenberuf}の職業についてのヘルダーの見解を知るに至った。諸侯は本当は“神の自然法則”^{göttliche Naturgesetze}の“執事”^{Haushalter}であるべきである。“大衆の教育についての外国人作家の思考と例文の収集 *Sammlung von Gedanken und Beispielen fremder Schriftsteller*”の中で (IV, 473) ——1769年に書かれたが草案に終わった——ピョートル大帝は“ロシア国民がなれるだろう、またなるであろうことをすべて彼自身の中に感じていた”とヘルダーは述べている。“プロイセン王はこの感覚はもっていない”とヘルダーは付け加えている。彼の国は単に“洞察と政治的計画”にのみに基づいている。フランス語を話すプロイセン王、ヴォルテールの哲学の信望者、モーペルチュイ⁵⁹、ホルマイ⁶⁰、プレumontファル⁶¹、ダルゲン⁶²のようなフランス人学者たちをベルリンに召喚したプロイセン王は、ヘルダーの意見によれば、政府のすべての基本的な統治義務について罪を犯した。“いずれの国民^{jede Nation}も”——と彼はメモに書いている——“精神の資源と、精神の特異性、性格の特異性、そしてラントの特異性をもっている”。“これらはさがしだすべきもの^{aufsuchen}と且つ養うべきものである”、これらは求められない、“盲目的に他の国民が手本にされるならば、すべては窒息する”。“最初の文化は、国民の中にあるものの使用である：国民の中に眠っているものを目覚めさせて、そして使用する”。ヘルダーは、フリードリヒ大王は国民^{Nation}を統率するのに必要な天分をもっていないと断言している。彼は“彼のドイツ人を分かっていない”“プロイセン人を見くびっている (IV, 406)”。詳細に調べてきた1774年の著書にも、フリードリヒ大王への激しい攻撃が充満している。ハイムが適確に証明したように⁶³、多くの言い回しがヴィルヘルム フォン ビュックスブルク伯とその他の事情を指し示す時は、主たる批判は、公的あるいは秘密裏にプロイセン王を攻撃している。名前の挙げられているその書物は、先ずはヴォルテールに矛先を向けていたのは分かった。とはいえ、ヘルダーはフリードリヒ大王の世界観はフランス人の哲学者の世界観と同じだとしている。フリードリヒ大王もまたヘルダーにとっては合理化^{Rationalisierung}することの精神および水準化^{Nivellierung}することの精神、宗教軽視^{Religionsverachtung}の精神および愚弄^{Spott}の精神の化身である。“十重のやり方で、われわれの小さな或いは大きな人物は、柵と遮断棒を取り壊すことに貢献している”と、ヘ

ヘルダーはかつて言っている。“いわれているように、身分の・職業の・教育の・宗教の偏見をつくり、それらの損害自体をばかにした。わたしたちは全員単調な教育、哲学、不信心、啓蒙、悪習によって、そして最後には添え物としてのために：つまり抑圧、残虐、飽くなき欲望によって——わたしたちの哲学をたいへん賞賛し、それを手に入れようと努力することによってわたしたちを元気にする——わたしたちはきょうだいになる”。特徴的なことだがヘルダーのこの文章は反マキャベリの批評を始めている、それゆえ批評が誰に向けられているのかは疑う余地がない⁶⁴。

1780年12月にヘルダーはヨゼフ二世の詩を作った、それは彼が一時期皇帝の人格に希望をつないでいたことを示している。彼は希望をその君主に懸賞論文『学問への政府の影響について *Vom Einfluss der Regierung auf die Wissenschaft*』をもって送っている⁶⁵。それゆえ人はヘルダーの政治観の内容に対してそれほど重きを置いてはならない。彼は詩の中で、その皇帝、“99人の諸侯と海の砂ほどいる等族たちの首長”は、“一つの法と一つの言語と一つの宗教が支配する”“ドイツ人の祖国を”つくりあげるであろう、“フリードリヒが遠くからみるだけで促進しなかった”“魅力的な時代”をドイツにおいて開始するであろうという期待を述べている。ヘルダーはフランスの哲学と芸術を好んだフリードリヒ大王にしばしば非難を以下のように浴びせた；わたしたちは大帝にここで直にお願ひしなければならぬ、大手本として、プロイセン王としてドイツ人の精神生活を正当に評価することを、大王にお願ひする。この詩に深い意味はない。逆に、ほとんど同じ時期に、この詩が生まれたのとは反対に、ヘルダーはグライムの影響下でゆっくりと内面的にフリードリヒになびいていった⁶⁶、そしてのちに、留保をもってしても、フリードリヒ大王によって創設された諸侯同盟の支持者になった。『プロイセンの王冠 *Preussische Krone*』という、ロシアについての詳細な論述と一緒にまとめて1802年に5つ目の“アドラステア”の中で公表した論文が、はじめて、ドイツ内部におけるプロイセンの召命にたいする完全理解をもたらした。ヘルダーは(23巻455頁以下)1701年1月18日の(初代)プロイセン王戴冠式の記念誌をつくり、その中にプロイセン選帝諸侯のこの地位向上がドイツ全土の繁栄のために獲得した深い意味を説明している。17世紀と18世紀の転換期は——そう彼は詳説する——“物事のつながりが王冠を与えた”時代だった。ドイツ人の領邦君主だった二つの一門、ハノーファー家とヴェットティン家は、ドイツ人領土の所有によって、さらに外国の王冠を手に入れた、かれらの関心の重点はそれゆえ帝国の外へと場所を移した。ブランデンブルクだけが純粋にドイツ人の権力として上昇した。ザクセン選帝侯の、ローマ教会への移行によってコルプス・エヴァンゲリコルムはその首長を失った；プロイセンはいまや“すべてのプロテスタント、つまりカルヴァン派とルター派”の避難所となった。これはしかしながら一瞬にして生じた、というのは、ドイツにおけるプロテスタント教会は、ドイツ人諸侯の宗派転換によって、また民衆のなかでのイエズス会の組織的な仕事によって“教会の柱の上で揺らぐように”みえたからである。ヘルダーはこの点についてこの論文中でプロイセン諸侯、とくに大選帝侯、フリードリヒ ヴィルヘルム1世とフリードリヒ大王にたいして賞賛の暖かい言葉を見つけている。しかし彼がここで褒めたたえるプロイセンは、その当時のドイツにおけるすべての他の個別国家のようなものでは決してない。国家特有

の権力政治を迫及する領土^{Territorium}ではない、そうではなくて、むしろそれは一般的ドイツ人の精神生活の世話人であり、保護者である。17世紀と18世紀における絶対主義が大方のドイツ連邦構成諸州の中でドイツ人思想家に影響を及ぼした重圧に直面して、ヘルダーが際立たせたプロイセンは、すべての迫害された各人に避難所^{Freistatt}を与えた。“クーアザクセン”がくたびれたときはいつもベルリンがクーアザクセンを支援した；トマジウス⁶⁷がライプツィヒを去らなければならなかった時、かれはハレで教えることを許可された。アウグスト ヘルマン フランケ⁶⁸、ペーターゼン^{P e t e r s e n}、アルノルト^{A r n o l d}、ディッペル^{D i p p e l}自身さえ、そして他の多くのものが自分の意見のために侮辱された時、ブランデンブルクの諸ラントにおいて保護または昇進を見つけた；新しく創設されたハレ大学は全学部において、庶民性と率直さによって、新しい考え方と構想を際立たせた。三十年戦争によって破壊したドイツはこのプロイセンの政治によって文化的な面で、ヘルダーが強調したように“新しく活気づいた。”この時代の苦悩に打ちひしがれた民衆は自らの力によって上昇することができず、信頼できる指導者の助けが必要だった。プロイセン選帝侯だったフリードリヒ三世がケーニヒスベルクで戴冠した時、期待として、ドイツ人意識によって古い表現が広がった。“真夜中から”——そう人は言った——“金色は近づいてくる、新しい幸運の時代が”^{k o m m t G o l d N e u e s G l ü c k d e r Z e i t e n}。そしてそれ以降は、プロイセンはドイツ人召命に忠実だった——ヘルダーは強調している——：“他のどの国家よりもいっそう多く”、プロイセンはヨーロッパの明るさのために、ドイツ文化の発展のために、民衆の世間一般の範囲内で貢献した。ドイツ全体の意見の側に立つ世界の中でのプロイセンの影響に非常に大きな意義を与えるこの論文は、末尾のところで、今後、世間一般のドイツ人の事柄で、より多くの深い影響がこの国家に当然向かってくるといふ意見を述べている。この論文は既述したように、ドイツ国民の神聖ローマ帝国の完全な消滅がナポレオン戦争の一撃の下で既に事実になっていた1802年に書かれた。プロイセン人が1795年にフランス人と結んだバーゼル和平条約によって、ドイツは敵対的に向かい合っていた北と南に二分割された。カンポ・フォルミオ講和条約によってオーストリアもむき出しに自己利益を帝国の利益から剥ぎ取った。残っているドイツはラシュタットでの講和会議で、フランスの執政官の有利を巡って、あの屈辱に満ちた競い合いを始めた。しかしオーストリアと南ドイツがそれまで戦争負担に耐えたのにひきかえ、プロイセンはプロイセン中立停止の1795年以降は戦争負担を享受した。プロイセンは無傷だった、そしてこの状況だけでも、ヘルダーがプロイセン人にいまやドイツにおける一般的無力さの状況の中で、指導を信頼して任せるようとする⁶⁹ことは理解できる。どのかたちでヘルダーがドイツにおけるプロイセンの覇権を考えていたかは言い難い。祖国統一へと強力外交へと導いたやり方は、どれも、彼にとっては当然だった。なぜなら、この統一という考えは唯一ヘルダーの大きな政治的情熱であった。その人道主義的哲学者は現実主義の政治家マキャベリを1795年に一度だけ弁護した：マキャベリはここ2世紀のあいだで最も素晴らしい頭脳の持ち主、とりわけ反マキャベリの著者から誤解されていた人物である。ひとは常に彼の実践的な政治の教えに重点を置いた。これはしかし一時的制約の中での時代精神の表現である。マキャベリの本当の目的は、イタリアを統合すること、イタリアを外に向かつては“野蛮人”から解放すること、剣を手に持ち、イタリアから継続して獲得物を強引に奪い取ろうとす

る“野蛮人”から解放すること、そして（イタリア）内部では“諸侯芸術の不器用な徒弟たち、イタリアの落ち着かない不満分子たちから解放すること”がマキャベリの本当の目的だった。（XVII, 322）。ヘルダーはマキャベリをそれゆえ、彼が受けた否定的な批評とは正反対に“歴史経験者で、人生経験が豊かな人物”また“誠実な人物”と述べている。その観点は：外に向かつては威勢よく、自立した発展、つまり外国の干渉によって邪魔されない、そして（イタリア）内部では政治的にも精神的にも力強く統一な国民的かたまりというこの観点は、ドイツ人の事柄に対するヘルダーの態度表明にとっては継続して主要だった、唯一のものだった。彼はこの点でも個々の問題に対して実践的に詳細に見解を述べなかつた、そうではなくて、一般的にのみ、ここではしかし常に新たに、若干数の同盟諸侯の地方分権主義と、諸侯の外国との特別同盟と戦った。“ドイツは混乱状態である”、そのように彼は一度自らの論文『帝国史について *Über die Reichsgeschichte*』の中で1769年に“批判的な著作集”の中で、述べている。カオスから、諸公、諸伯、そして諸君主、司教と高位聖職者たちは立ち上がる（III,466）。ヘルダーは、ドイツは文化的に統一されたギリシアの精神でも、固く結束されたローマの権力組織でもないという点で嘆いている。具体的、政治的關係に対して、ヘルダーは、プロイセンとオーストリアのあいだの、当時支配していた深い対立を克服するという決意を見出した。すでに述べた論文『プロイセンの王冠』は以下の言葉で終わっている：“オーストリアとプロイセンは永遠のライバル、けっして和解しない敵同士と見ている政治には敵意がある。”プロイセンとオーストリアを分けた不和はほとんど消滅した、そしてまもなく時代は期待できる、なぜならヨーロッパ共通の幸せのために、ドイツの、そしてドイツ人出自の民衆の平和保持のために、重要な関心が両者を密接に結びつける。（XXIII, 463）。同じ考えを、1803年に6番目のアドラスティアに出てくる、そしてズファンの査定によれば1798年に詩作されていた『ゲルマニア *Germanien*』が既に述べている⁷⁰。フランス軍を目前にしてのドイツ人諸侯の恥辱に満ちた逃走に直面して、ヘルダーはここではまったく諸侯を無視している。“宮廷はお前を守らない；敵が近寄るや否やかれらの魅力は消えうせる”と、敵はここでドイツ人民衆に大声で呼びかける。その詩すべてが民衆そのものへの熱烈な呼びかけである、民衆の言葉、民衆の宗教、世界の中の民衆の存在を守るという呼びかけである。それはヘルダーの国民という考え方の気高いリートである、しかし完全に意識した力の中での、まったく彼特有の、現実で埋め尽くされた自己主張のリートである。わたしたちは『イデー』の中でヘルダーを、諸国民はかれらの諸侯と勇士の支配欲と征服欲に対して平和的かつ幸福に、神の地上における啓示として共存するために自らを守らなければならなかったという考えの支持者だったと理解した。平和主義に染まったこれら民主主義的な理想は、はるかなポレオン時代にまで入っていく。それらはヘルダーには信仰であり、教義ではなかつた；つまり、フランス人のドイツ侵入の時代に高まる危険をとまなつて、外に向かつて自己主張という思いが、あらゆるかたちで且つあらゆる手段を用いての自己主張という思いが前面に出ている。ヘルダーはこの点においてドイツは不統一によって第二のポーランドになると警告している。彼はドイツに、ドイツの敵、強くなったロシアと、すでにドイツから大勝利を手に入れていたフランスを示している。ここではそれは、彼が撲滅しようとするのは領主の権威そのものではなく、ドイツ

の不統一である。これだけは、ヘルダーは葬り去りたい、そして一つの、全員に共通の、
 高い精神的な責務をもつ自己意識を目覚めさせたい、^{Verworrenheit Selbstsucht} 当時の混乱と利己心の中へ入って
^{Wirf die lähmende Deutschtweit weg} きドイツ民衆に大きな声で呼びかける時はいつも：“萎えたドイツ氣質を捨てよ、そして
^{und sei ein Germanien} ゲルマニア氣質であれ”。

(Endnotes)

- 38 Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716)
- 39 Baruch de Spinoza (1632-1677)
- 40 Shaftesbury (1671-1713)
- 41 „Vernunft“ so definiert Herder 1Bd. 245 heisst der Charakter der Menschheit; denn er vernimmt die Sprache Gottes in der Schöpfung, d.i. er sucht die Regel der Ordnung, nach welcher die Dinge zusammenhängend auf ihr Wesen gegründet sind. Sein innerstes Gesetz ist also Erkenntnis der Existenz und Wahrheit u.s.w.
- 42 Rudolf Haym: Herder 2.Band 252.
- 43 „Recensionen“ von I.C. Herders Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit: In Immanuel Kants sämtlichen Werken herausgeg.v.G.Hartenstein 4.Bd.Leipzig 1867 S.184.“
- 44 Bd. 4, 468, 69.
- 45 Herder weist in seinen „Briefen das Studium der Theologie betreffend“ Bd.10 auf die Schrift hin.
- 46 Bremen 1777.
- 47 Herder nennt es in seiner Schrift von 1774. V, 491.
- 48 Milton (1608-1674)
- 49 Nur beiläufig sei darauf hingewiesen, dass nicht das unbedeutende Buch Robert Woode: Conjectures on oroginal composition, das im Jahre 1769 erschien, in erster Linie auf die deutsche Bewegung des Sturms und Dranges gewirkt hat. (Vergl. Hermann Hettner und Max Koch: Geschichte der deutschen Literatur, Leipzig und Wien 1910, S. 235), sondern wie Herders enge Uebereinstimmung mit Blackwell zeigt, dessen schon 34 Jahre früher erschienenes Werk.
- 50 Rudolf Haym: Herder II 465 ff.
- 51 Immanuel Kant (1724-1804) : Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht. 1784 Ausgabe v.G.Hartenstein, Kant's sämtl. Werke, S.148 und 151.
- 52 Vergl. Rudolf Haym: Herder Bd. 2, 250.
- 53 Aehnliche Charakteristiken kehren immer wieder; u.a. XIV, 296.
- 54 Dass die individuellen Kräfte, die in einer Nation zusammenströmen, bei Herder in erster Linie im Staat zum Ausgleich kommen; dieser Ansicht Moritz Ritters über die Herdersche Geschichtsphilosophie kann ich mich nicht anschliessen(vergl. Moritz Ritter : Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft. München u. Berlin 1919. S.273)
- 55 Humanität und Nationalität. Eine historische Säkularschrift zum Andenken Herders, Berlin 1889.
- 56 Küntzel, Br. Pr. F. 13.
- 57 „Herders Lebensbild“ herausgeb. von seinem Sohne Emil Gottfried. Erlangen 1846. I.242.
- 58 Vergl. Th.G.Masaryk: Zur russischen Geschichte und Religionsphilosophie. I.S.100,S.184, Jena 1913.
- 59 Pierre Louis Moreau de Maupertius (1696-1759)
- 60 Formey (1711-1797)
- 61 Premontval
- 62 dArgens (1703-1771)
- 63 Haym: Herder Bd.1, 539.
- 64 Auch andere Stellen in der genannten Geschichtsphilosophie, so V. 545, „ siehe wer die

Menschenfreundschaft, Völkerliebe und Vätertreue am schönsten besingen kann, hat vielleicht im Sinne, ihr auf Jahrhunderte den tiefsten Dolchstoß zu geben. Dem Scheine nach der edelste Gesetzgeber, vielleicht der innigste Zerstörer seines Jahrhunderts“ und auch das Gedicht. „Das witzige Königswahl“ XXIX, S.464 zeigen, wie gänzlich Herder die Persönlichkeit Friedrich des Grossen abgelehnt hat.

- 65 Vergl. Bernhard Suphan in der Ausgabe der Herder'schen Werke, 29,746.
- 66 Rudolf Haym: Herder, 2. Bd.466.
- 67 Christian Thomasius (1655-1728)
- 68 August Hermann Franke (1663-1727)
- 69 Im Jahre 1799 hat Herder einmal an Gleim geschrieben: „Das halbe Deutschland, ja mehr als Hälfte, hat dem König von Preussen jetzt schon seine Errettung zu verdanken.“
- 70 Bernhard Suphan (1845-1911) : Zwei Kaiserreden. Berlin 1879.

